

あらゆるものを「カワイイ」と表現するなど、借りものの言葉が多用される昨今。しかし、人の胸を打つ文章を書くためには、そんな月並みな表現ではなく、自らの感覚を通じた「自分の言葉」「生の声」を使いたいもの。今回は、そんな「自分の言葉」による表現の具体例を紹介していただきました。

「借りものの言葉は使うまい」

新聞記者時代の先輩に岡 並木という記者がいた。都市交通問題の専門記者で、つねに現場を大事にし、独特のすぐれた記事を書く人だった。その岡さんと文章論の議論をしたとき、彼はいった。「いい文章というのはね、自分の目、耳、肌、心でつかまえたものを、借りものではない自分の言葉でわかりやすく人に伝えることじゃないかな」

岡さんらしい言葉だと思った。いまは残念ながら借りものの言葉が巷にあふれている。あらゆるものを「カワイイ」で片づける風潮が支配的だし、スポーツ選手はインタビューの最後に「応援、よろしくお願ひします」と叫ぶ。みな、借りものの言葉だ。

他の人がいうから自分もいう。人をいじめる時に使う「死ぬ」「うざい」も、借りものの言葉だ。きつい言葉でいえば、借りものの言葉が得意な人は借りものの一生を生きることになる。

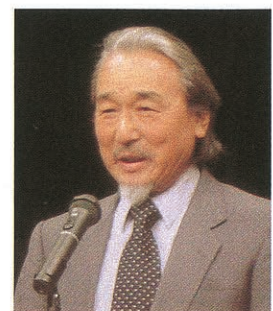
◎ 学校だより、学級通信などを読むと、すば

らしい出来ばえのものがあ、目を見はるこ
とが多い。だが、一方で不満に思うのは「目、
耳、肌、心でつかまえたもの」を、自分の言
葉でいつたり、書いたりする子どもたちの姿、
声が少ないことだ。

紙面には、「頑張りました」「うれしかった
です」式の月並みな言葉が並ぶ。それらの言
葉の一つ一つは、きれいな、肯定的な言葉で
なんら問題がないように見えるが、同じよう
な言葉がこれでもかこれでもかと並ぶと、つ
い首をかしげたくなる。

逆に、楽しい会話もある。
「みんなイケメンやから、目がハートにな
りそうやわあ」「先生、それは、恋をするこ
とで」。一年生坊主でもませた子がいる。
これは、男の子たちがトイレのスリッパを
キチンと並べた時の、先生の褒め言葉と児童
の反応だ（国東市立伊美小学校学級通信「ぱ
ちぱち」）。

担任の先生は常にデジカメとメモ帳を持



●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニュー
ヨーク支局長、東京本社社
会部次長、編集委員を経て、
論説委員。「天声人語」を
13年間にわたり執筆。平成
6年朝日カルチャーセンター
社長を経て、現在著述業。

ち、子どもたちの生の姿、生の声をとらえる
努力をしている。そのことにも感じ入った。
長野市立豊栄小学校学年だより「もり もり もり」には、こんな話があった。

校内で飼っていたウサギのピョンが死ん
だ。なぜか？「餌が少なくてケンカになっ
て死んだ」という子もいたが、実際はどうだっ
たのか。この記事にも、借りものでない言葉
があった。死んだウサギを前にしての話し合
いは、子どもたちに命の重さというものを体
感させたはずだ。

「正直に言う、中学校はめんどうくさいこ
とばかりだと思ふ」という中学一年生の作
文が学級通信に掲載されていた。複雑な気持
ちを淡々と「分析」している作文で、少なく
とも自分の言葉で書いている点がいい。

読み手の心に残る記事はやはり、子どもた
ちの生の声だ。学年だより、学級通信には、
よそゆきではない作文、借りものではない言
葉をもつともつと掲載してもらいたい。

※文中で紹介した学級通信「ぱちぱち」、学年だより「もり もり もり」は第5回「育て！
プリントコミュニケーション」コンクール入賞作品集に掲載されています。入賞作品集をご
希望の方は、財団ホームページ(<http://www.riso-ef.or.jp/>)をご覧ください。